

サビエル生誕五百年



巡礼の道

233

藤屋 侃士  
(下松市幸ヶ丘)

## 年賀状から

毎日が巡礼

先日、満七十一歳の誕生日を迎えた。気持ち

ちは若いつもりではあるが、つい「もう歳だ

から」と、自分で自分を高齢者だと規制してしまうことがある。

届いた年賀状の中に

「八十歳を迎え、人生にひと区切りをつけ、年賀状は今年限りときせていただきます」というのがあった。

かなりの枚数の年賀状を出す負担になるので気持ちはわかるが、何か自ら社会に門戸を閉ざすような気がして寂しい気がする。

二年前に一緒に貧しいカンボジアの人たちを訪ねる旅をした八十四歳のカンガス神父様からは、たどたどしい日本語で「カンボジアやアフリカの子供たちの支援ありがとうございます。神の恵みと貧しい人々からの感謝の気持ちを受けて下さい」とある。

高齢になられても貧しい人々のために働かれ、昨年も片道二日をかけてアフリカのコンゴまで行かれた。前向きな生き方に圧倒される。

カンガス神父様とともに特に刺激を受けた年賀状は梅光学院大学元学長の佐藤泰正先生からのもの。

先生にはザ・モール周南での「KRYかたつむり大学」の文学講座で十年近くお世話になった。夏目漱石をはじめ近代日本文学評論の第一人者で、今年九

十四歳。賀状には「まだ授業も続けています。が、そろそろライフ・ワークのまとめをと考えています」とある。

昨年、佐藤先生から出版されたばかりの「これが漱石だ。」が送られて来た。すぐお礼の電話を差し上げ「私も七十歳になりました」と言う。「七十歳台は私の人生で最も充実した時でした」と言われ、返す言葉が失った。

金持ちとか、社会的名声が高いとかではなく、高齢になられても学問に打ち込む姿がすごい。

机上のサムエル・ウルマンの「青春」の詩が目に入る。

青春とは人生のある期間ではなく、心の持ち方を言う……たくましい意志、豊かな想像力、炎える情熱……臆病さを退ける勇氣、安きにつく気持ちを振り捨てる冒険心……。

年を重ねただけで人は老いない。理想を失う時、初めて老いる。人から、神から、美・希望・喜び・勇氣・力の靈感を受ける限り君は若い。

頭（こうべ）を高く上げ希望の波をとらえる限り、八十歳であろうと人は青春に生きる。

佐藤先生やカンガス神父様は、まさにウルマンの詩に生きておられる。

改めて一枚々々の年賀状を見ると、そこにはたくさんメッセージがある。確かに形式的なものもあるが、忘れずに賀状を下さった方に感謝あるのみ。

賀状に「兎（うさぎ）の耳で、神の、人の、友の声を聞く」と書き添える。

ご主人とはトルコの旅で知り合いになり、以後親しく交際させていた。交わりを大切に、そして私もウルマンの詩に生きるよう努力したい。

（元山口放送取締役ラジオ局長）



耳が10等もあるウサギのちりめん細工

佐藤泰正

●文芸春秋

これが漱石だ。

93歳で出版された本